

## 「参画と協働」により活動を進めるポイント

今回、さまざまな施策の状況把握を進める中で、自治会、婦人会をはじめとする地域団体、ボランティアグループ、NPO など、多様な主体による地域づくり活動の展開や、県の各施策・事業の推進の過程で、「参画と協働」の考え方に立った多彩な工夫がされていることがわかりました。

それらの取り組みから伺える「参画と協働」により活動を進めるポイントは次のとおりです。このようなポイントを参考に、各団体等においても、活動を一層充実させ、より効果的な展開をしていただくことを期待しています。

### （多様な主体の連携）

自治会、婦人会、老人クラブ、ボランティアグループ・団体、専門家、社協、NPO など、地域を構成する主体を多く巻き込んで展開した事業は、地域でスムーズに定着しています。

### （柔軟な制度）

県の事業でも、活動内容や範囲を一律に定めず、活動状況に合わせて認定する、団体が希望する支援を行う、住民の活動のしやすさを優先し、適宜、制度の見直しを検討するなど、柔軟な制度設計とすることで、事業への参加団体が年々増加しています。

### （メンバー間の認識の共有を重視）

複数の団体が、活動への考え方や進む方向等、メンバー間の認識の共有が重要だと考えています。

ある団体では、定例会(月1回)の開催とその議事録により、全員が状況の把握に努めています。

議事録の作成など非常に手間がかかっても、活動の認識の共有という基本部分は丁寧におさえていくことが活動を継続するうえで重要と考えられます。

### （情報発信として交流が有効）

活動をPRする方法として、シンポジウムやフォーラム等に積極的に参加し、活動の内容を発表していくことが非常に有効だと考えられます。

フォーラム等で知り得た団体からの協働の申し出、他団体との交流の拡がり、活動の活性化、メディアでの活動の紹介、参加者の増加、と活動の好循環をもたらす重要な要因になっています。

### （広く意見を聴取する）

事業計画等を考えるときに、熱心に活動している人の意見を積極的に取り上げる、すべての関係者に丁寧にヒアリングをする団体もあります。

広くメンバー等の意見を聴取し、事業に反映するように努めることは、メンバーの意欲を高めるとともに、活動を円滑に進めることにつながります。

### （活動を楽しめる運営をする）

多くの団体が、メンバーが負担に感じず、活動を楽しめるよう運営することが重要だと指摘しています。

活動の基本ルールのみを決め、それを超える活動は希望者の自主的な取り組みを認める等、自主性の幅を確保することが、参加者や手法の拡充と、事業の継続や新たな展開につながっています。

### （活動に小さな変化をもたせる）

活動を継続、進展させていくために、アイデアを出し合い、負担にならない程度で新しい活動要素を加えていくことが重要な要因になっています。

活動のマンネリ化や閉塞感を避けるとともに、新たな展開により協働する相手方や参加者が増える、収入が増加する等、活動がよい方向に循環しています。

### （自己資金の確保）

複数の団体が、行政からの助成では充当できない経費に充てるため自己資金の確保に努めています。

これは、メンバーの経済的負担の軽減、雑費の集金など雑務の削減につながり、活動の継続を支えます。また、自己資金を元にした事業の拡充、交流の充実による協働相手の拡充等、今後の活動に拡がりをもたらします。

## 「参画と協働」の先進的な活動事例

県内各地で多彩に展開されている活動から、平成 19 年度に話題となったものなどについて、その一例を紹介します。

(神戸地域)

### 外国人県民を支援する巡回相談活動の実施 (NGO神戸外国人救援ネット)

NGO神戸外国人救援ネットは、神戸地域で行う週 1 回の多言語による相談活動に加え、年に 3 回程度、兵庫県内各地に出向く巡回相談会を実施しています。

県内には 140 カ国、約 10 万人(平成 19 年 12 月現在)の外国人県民が生活していますが、母語で暮らしに関する相談ができる場所は都市部に多いことから、県内では珍しい多言語での巡回相談を実施している同団体の活動は重宝されています。

平成 19 年度の福崎町、平成 20 年度に予定する南あわじ市ではいずれも初めての開催となり、活動範囲が次第に広がっています。

また、この巡回相談は、地域の外国人支援団体や有志のメンバー、市町などと連携して実施しており、巡回相談会をきっかけに、定期的な相談体制や、多様な団体等が協力して相談に取り組む外国人支援のネットワークがさらに広がっています。



(阪神南地域)

### コープこうべの森づくり(森づくりコミッション事業) (コープこうべ)

コープこうべでは、レジ袋の削減によるCO<sub>2</sub>の発生を抑制するため、平成 7 年からマイバッグ運動を推進しています。

CO<sub>2</sub>の排出削減にさらなる貢献をするため、(レジ袋を必要とする人には販売して) 2006 年度に貯まったレジ袋代 3,324 万円を活用して森林整備活動しようとして、(社)兵庫県緑化推進協会にコーディネートをお願いし、西宮市が所有する社家郷山キャンプ場周辺の森林を活動フィールドにすることになりました。

この取り組みは、県の「森づくりコミッション事業」の第 1 号事業で、平成 20 年 5 月 17 日に、兵庫県、西宮市、(社)兵庫県緑化推進協会との 4 者で、「森づくり活動への取り組みに関する協定」を

締結しています。

この協定に基づき、コープこうべは、県・(社)兵庫県緑化推進協会から、活動計画作成の助言・提案や、森づくり活動の技術指導者、森林保全・管理団体の紹介などの支援を受け、森林保全(管理)団体の協力による森林整備や、住民やコープの組合員などの環境学習を進めています。



## 里山を生かした地域の活性化 (黒川まちづくり推進協議会)

大阪・神戸の都心部から電車で1時間の場所ながら、日本一ともいわれる里山に四方を囲まれる川西市黒川地区は、少子高齢化に伴って主要産業である農林業の衰退、里山の荒廃、人口減少等が進むなか、ごみ消却施設の建設をきっかけに、地域の将来に危機感を持った住民が立ち上がり、活性化に取り組んでいます。

同協議会は平成18年6月に地区居住者を会員に設立され、熟年・壮年・女性の3グループで構成され、能勢電鉄、一庫ダム、一庫公園、J A、N P O、行政等8団体の協働により運営されています。

休校となった黒川小学校を活動拠点に、わら細工の講習会、まちづくり活動にかかるワークショップ、里山まつりの開催、

黒川ブランドの開発、ピザ窯の集いなど多彩な活動を展開しています。

地域をあげての熱心な里山保全等への取り組みから、同地区は平成21年度の県の「ひょうご森のまつり」の開催地にも指定されています。



## 新旧住民の交流を促進するイベントの開催 (高砂市曾根町連合自治会)

高砂市曾根地区は、昭和50年頃から開発により急速に人口が増加し、世帯数も約4,000軒と3倍近くになっています。秋祭りを通じて新旧住民の交流を図ってきましたが、参加者が若い人等に限られるため、自治会では広く住民の交流が進む場を探していました。

平成17年の市政50周年の機会に、「曾根・昭和の写真展」を開催しました。多くの住民の参加を得るため、全世帯に展示写真の提供を求めるなどの仕掛けをした結果、1週間の開催期間中に約4千人が来場し、また、会場の手伝いへの参加もあり、旧知の再会、新たなふれあいなど交流が進みました。

この経験を生かし、平成20年8月に

は、県民交流広場事業を活用して、住民手作りのペットボトルのオブジェやあんどんの光で地域を包む「灯りゃんせ」を開催しました。このイベントには約5千人の住民らが参加し、地域の絆は着実に深まりつつあります。

今後もこうしたイベントでの工夫を重ね、住民の交流を深めたいと考えています。



### 団地住民による「子育てひろば」の運営

(あじさいローレル子育てサロン)

三木市にある同団体は、子育て中のお母さんと子どもに気軽に集ってもらい、仲間づくりをしながら、子育ての悩みを一緒に考え、また、子どもたちの遊ぶ空間をつくる子育てサークルです。

数ある子育てひろばの中で、このサロンは、高齢者を中心に団地の住民が自発的に集まり、参加したい親子は団地の自治会員に限らず誰でも参加できる形で運営している点が大きな特徴です。

子どもたちにとっては祖父母の年代にあたる人たちが毎週水曜日に開催するサロンは、気さくで親しみやすい雰囲気の中で、お母さんたちは様々な相談にのっても

らったり、おしゃべりができ、子どもたちは同団体で手づくりしたおやつも振る舞われるので、お母さんと子どもの両方からとても楽しみにされ、また、頼りにされています。



### 歴史を生かした景観保全のための取り組み

(歴史と出会うまちづくり船場城西の会)

当会は、高齢化・空洞化や、姫路赤十字病院の移転による来訪者の減少などで失われつつあった町の活気を何とか取り戻せないかと、地域のメンバーが立ち上がったのが始まりです。

船場城西地区は、安土・桃山、江戸時代の遺跡や歴史的な町並みが多く残っています。現在、船場御坊(船場本徳寺)の境内で行う楽市やコンサート、地域の隠れた魅力に触れる歴史ウォークなど、多様なイベントを開催しています。

年に5回開催する楽市には、毎回2千人超の来場があるなど賑わいを見せており、地域に活況をもたらすものと地元で認識されるようになりました。平成15

年6月に10名で発足した当会は、現在265名の会員を数え、内8割が地域住民で、多くの専門職も参加しています。

今後とも市民の自発参加型活動を基軸に、無理をしない、息の長いまちづくり活動を実践する一方で、NPO法人化など組織実行力の強化に取り組んでいこうとしています。



### 地産地消による学校給食の推進 (太子町地産地消学校給食推進協議会)

地元の生産者、加工流通関係団体、学校給食関係者、PTA、行政等で構成する同協議会では、学校給食を通じた地産地消の取り組みを推進しています。

「食育の日」(毎月 19 日)を隔月で 100% 県産農林水産物による給食日としたり、学校給食センターと生産者との情報交換により、給食における地域農産物の消費が格段に増えています。

加工グループは、小学生が町の特産品の「みそ」や「いちじくジャム」を作る体験学習の講師を務め、給食の枠を超えた食農教育を実践しています。また、給食で使った地場産物や生産者を紹介した

「給食だより」の配布や、給食センターの栄養士や加工グループが講師となり、PTA を対象に「太子町の郷土料理」の調理実習を開催するなど、親子で地元の自然・食文化・産業等について理解を深めてもらう活動を進めています。

引き続き構成員が連携し、地域の産物で子どもたちの食を支えていきたいと考えています。



### 住民等によるまちづくりを支援する基金の創設・運営 (生野ひいきの会)

旧生野町では平成 19 年に生野銀山開坑 1200 年事業を市民・各種団体・企業・行政などが一体となって開催しました。

この盛り上がりを一過性のものとせず、また、懸案であった住民の自主的な地域づくりを継続していくしくみづくりのため、住民有志や地元企業などが、資金面からまちづくりを支援する「生野ひいきの会」を 12 月に結成し、平成 20 年初めに基金を創設しました。基金は、地元の個人・企業・団体や地元ゆかりのある個人・団体等の寄付を財源とし、活動団体等からの申請に基づき、イベント等の必要経費に充てられます。

基金の運営は、旧生野町を発祥の地と

する但陽信用金庫が、窓口業務を担うなど、中心的な役割を果たしています。また、公正を期すため、市職員など中立的な立場の人を構成員とする助成金交付審査会での審査を経て、助成を決定しています。

活動団体等からは、提出書類が簡素なこと、複雑な申請条件がないこと等から使いやすくと大いに活用されています。



同会のロゴ

**恐竜の化石を活かした里づくり（上久下地域自治協議会）**

同協議会では、平成 18 年 8 月に国内最大級の恐竜の化石（丹波竜）が地域内で発見されたことを機に、地域一丸となって、地域づくり、人づくりを進めています。

化石発見後、「恐竜の里」のPR、発見地や地域の見所を紹介する看板の設置、ボランティアの協力を得て地元の木工会社が自ら製材し、発掘現場が一望できる展望台の製作などをしてきました。

平成 20 年 8 月には化石発見 2 周年の記念イベントを開催し、発掘現場の開放、化石産状レプリカの展示、100 人以上の地域住民が参加して地元の間伐材で製作した等身大モニュメントの披露などにより多くの来場者で賑わいました。

約 2 年間で 4 万人を超える訪問者のもてなしと地域からの情報発信に力を注ぐとともに、上久下恐竜の里づくり協議会、全自治会、地元の事業者、地域住民などが協働して里づくりに地道に取り組んできた結果、同協議会がめざす地域の活性化が着実に進んでいます。

**芸術を通じた交流の促進（NPO 法人淡路島アートセンター）**

芸術を通じて人々が集まり、交流できる淡路島にしたいと考えた淡路島在住の芸術家たちが、台風によって半壊状態で発見された空き家をアート発信の拠点へと改造したことが、淡路島アートセンターの始まりです。

半壊の空き家「日の出亭」の修復作業や部屋を使った創作活動を賑やかにしているうちに、近隣住民との交流が生まれました。今では、装飾を施した回覧版や押し車を地元住民が日常的に使うことで、住民がアート発信の一翼を担っています。

また、地域団体や地元事業者の協力を得て、洲本公設市場の空き店舗での美術

館、地元シェフによる芸術作品にちなんだ料理、路線バスを利用したツアーといった多彩な企画を展開し、全国から島を訪れる人が増えています。

センターでは、活動を全島の的に充実させていくため、島各地にスタッフを配置し、その土地の暮らしにあったアートを提供していきたいと考えています。

